

水郡線沿線史跡めぐり (埴町・大子町・旧山方町)

ご多用の中、根本正顕彰会恒例の「ゆかりの地を訪ねる旅」にご参加いただき、ありがとうございます。

根本正の多くの業績の中でも、水郡線敷設へのご尽力は、特筆すべきものの一つです。大正11年山方宿までの開通から101年、昭和2年の大子駅開設から96年、昭和9年の全線開通から89年になります。「根本正の生き方に学ぶ」を教育の柱としている那珂市の小学生は、今年度、水郡線で大子を訪れる授業を計画しているそうです。

台風の洪水で壊れた袋田・大子間の鉄橋が復旧した年に計画した本旅がコロナ禍で2回流れ、去年は、偕楽園開設180年に因んだ旅を実施しました。3年越しにバス利用による水郡線沿線史跡めぐり(埴町・大子町・旧山方町)ができますことをうれしく思います。

主な日程等は下記の通りです。安全で楽しく有意義な旅になるようご協力をお願いします。

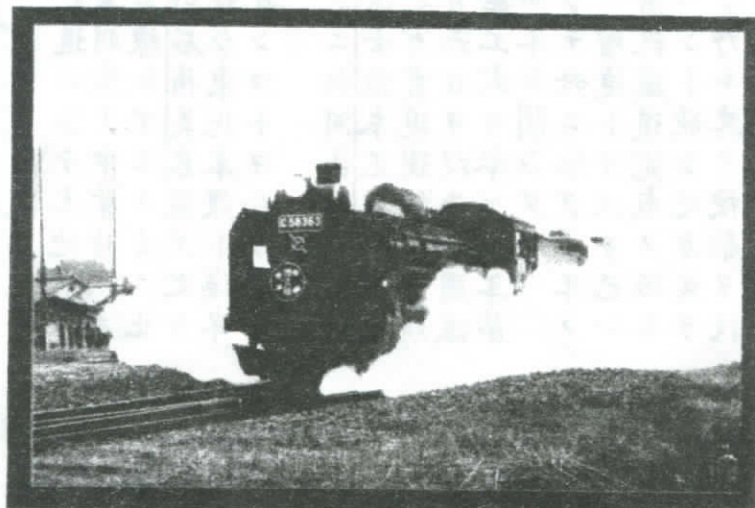
記

○ 日程(見学場所等)

- (1) 出発(那珂市中央公民館前第二駐車場) 8:30
- (2) 道の駅「かわプラザ」^{着09:15} 09:30 茶
- (3) 埴町 道の駅「はなわ」 向ヶ岡公園水郡鉄道完成記念碑 田中愿蔵刑場跡碑 ^{着10:30}
- (4) 昼食(大子町・奥久慈ゆばの里) 12:10~12:55 ^{茶11:30}
- (5) 大子町 根本正胸像(大子駅前) 13:05
最初の胸像跡・台座等(大子小校庭…十二所神社参道脇) 14:15
- (6) 旧山方町 山方城跡(御城展望台) 常安寺(五輪の塔、大串無事衛門墓)
14:45 山方宿駅(根本正演説) ^{16:15}
- (7) 帰着(那珂市中央公民館前第二駐車場) 17:30

*時間や体力等の関係で、一部、車内説明に変更するところもあるかもしれません。

○ 交通機関 中型貸切バス(トキワトラベル)



水郡鐵道完成記念碑

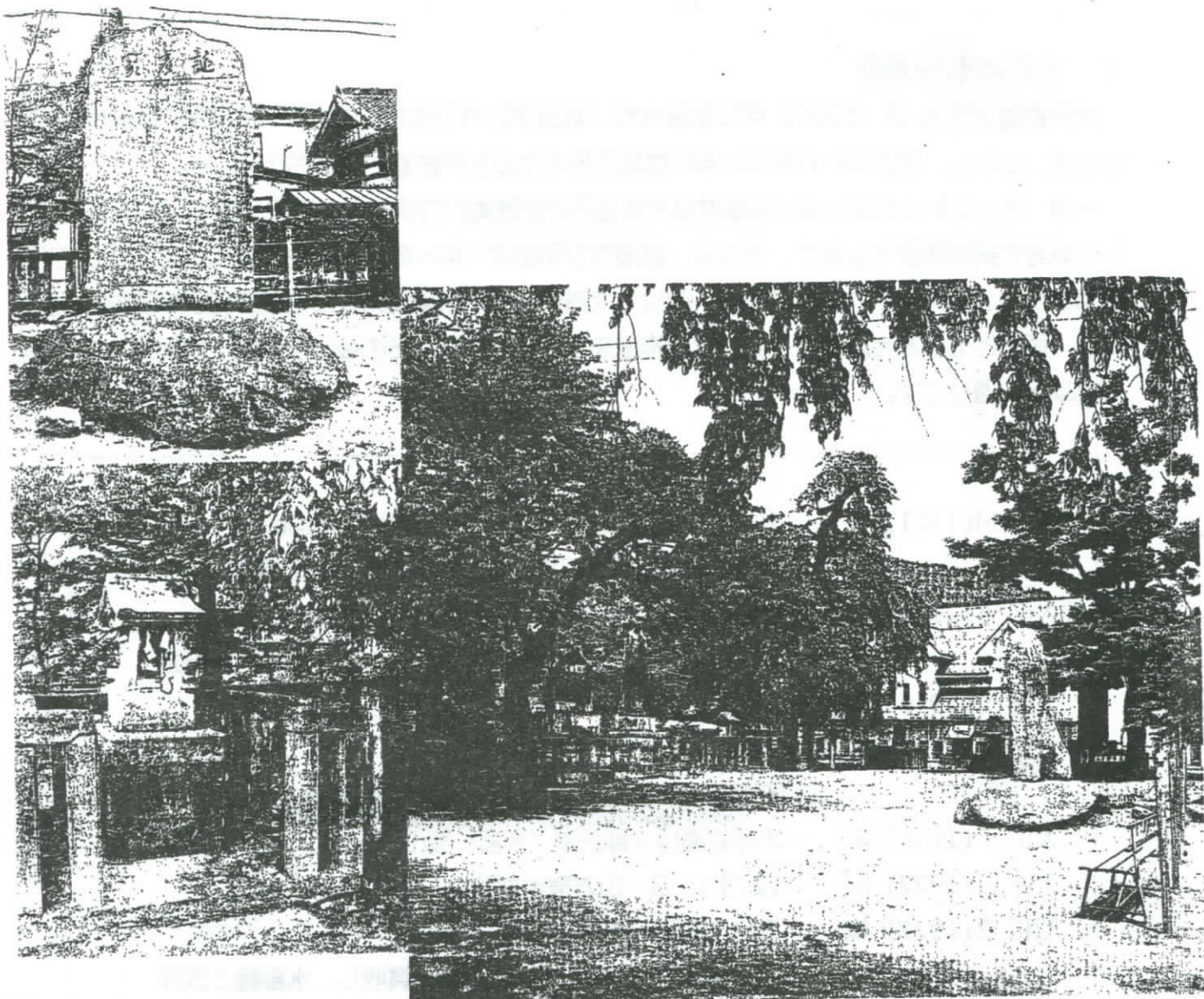
福島縣白川地方ハ古来兩羽及ビ越後ヨリ常陸水戸ヲ經テ江戸ニ至ル孔道ニシテ土地肥沃交通頻繁加フルニ農産林産及ビ鑛物ニ富メル地ナリ然ルニ維新以來明治ノ中葉時代ニ至ルモ交通機關ハ僅ニ中央ヲ貫通スル東北本線ト東海岸ニ沿ヘル常磐線トアルノミニ止マリ縣南地方ハ文化ノ惠澤ニ浴スルコト能ハザルモノ茲ニ歲アリ白石禎美君深ク之ヲ慨シ當時北海道選出代議士白石義郎君ト香議リ自ラ進テ身ヲ政黨ニ投シ東北本線ト海岸線トヲ聯絡スル白河高萩間ノ横斷線ヲ縣南地方ニ求メ其ノ先鞭ヲ著ケンコトヲ企テタリ而シテ君等ノ計畫ハ時機未ダ熟セサルヲ以テ空シク蹉跌ニ歸シタリ君等ハ更ニ白河高萩間ノ横斷線ニ換フルニ白河水戸間ヲ聯絡スル其後之ヲ水郡線ト改称シ極力之ヲ實現運動ヲ繼續ニ政府當局者ノ間ニ奔走スル所アリ其後之ヲ水郡線ト改称シ極力之ヲ實現運動ヲ繼續シタリ而シテ君等ノ提出シタル水郡鐵道建設案ハ明治四十五年三月六日ヲ以テ帝國議會ヲ通過セシガ爾來幾多ノ波瀾曲折ヲ經大正十年六月始メテ該鐵道起工式ヲ擧ゲ翌年第一期工程ヲ竣リ今茲十二月全線ノ完成ヲ見ルニ至ルマテ幾ンドテ有四年ヲ閱シタリ願フニ該鐵道計畫以來前後二十有八年苦心經營ノ結果國家事業トシテ終ニ能ク多事ノ懸案ヲ解決スルヲ得タルモノ畢竟君等ガ地方ノ資源開發ト國利民福ノ増進トヲ以テ己レノ任ト爲シ至誠一貫其ノ終始ヲ全ウシタル功ニ歸セザルヲ得ズ頃者該鐵道完成ノ域ニ際シ有志ノ士兩君ノ功績ヲ追念シテ己マズ碑ヲ建テ之ヲ不朽ニ傳ヘント欲シ之ガ文ヲ予ニ囑ス予其擧ノ世道人心ニ裨益スル所少小ナラザルモノアルヲ喜シ乃チ其ノ梗概ヲ叙シ之ヲ石ニ鐫ラシム

昭和九年八月下旬

蘇峰 德富猪一郎 撰
 白雲 山内 貞次 書

(水郡鐵道完成記念碑)

(福島縣東白川郡常豐村・岡向ヶ岡公園内)



町指定史跡

向ヶ岡公園

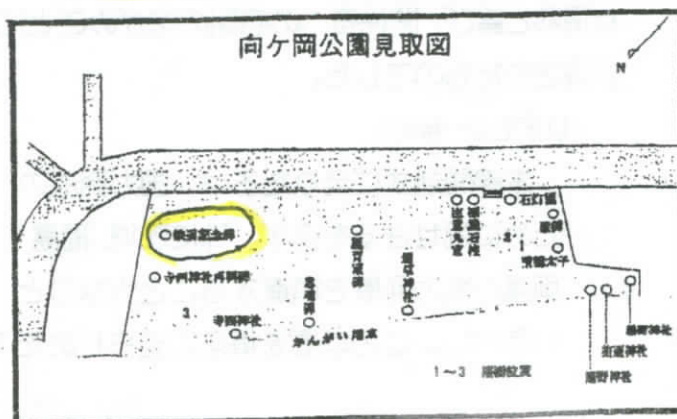
塙町指定 昭和51年9月21日
所在地 大字塙字川向道上104

公園とはいえ、現有面積約818平方メートル程で、外部は石垣によって境界を限られている。これは、県指定天然記念物の枝垂桜保護のため整備されたもので、故金沢春友翁の尽力によるもの、南側に県道が開かれた明治18年以前は九ツ山への山続きの岡であった。

この公園は規模こそ小さいが、寺西代官によって、庶民のいこいの場として造られたもの。時に寛政5年(1793)であり、本邦の庶民公園の鼻祖と云うべきものである。

園内には、文政2年寺西代官の最たる治積を後世に遺す誕育家がある。

熊野社があるため、別名熊の森公園という。向ヶ岡とは、塙陣屋から見て名づけたものと、先師は云っている。



7 水郡線敷設運動

大田鉄道は明治 26 (1893) 年に創業され、明治 32 (1899) 年に水戸～太田間の全線が開通します。しかし、明治 34 (1901) 年に営業不振のため水戸鉄道に譲渡されました。

一方、明治 36 (1903) 年に福島県白川郡笹原村会議員白石禎美が白萩線（白河～高萩）を計画して単身で実地踏査をします。その後、鉄道院が平郡線（平～郡山）を決定する一方で、白石禎美は白水線（白河～水戸）を計画し、叔父で北海道選出の衆議院議員白石義郎および茨城県選出の正（両者とも政友会議員）に建設計画推進を依頼しました。その後の水郡線全線開通までの経緯は以下の通りです。

明治 44(1911) 年	根本・白石兩代議士等提出の白水線建議案議決 9月14日 鉄道院建設課長石丸重美が沿線実地踏査
大正 4(1915) 年	11月 憲政会内閣誕生、水戸・郡山鉄道建設案否決 12月 水戸鉄道が上菅谷～大宮間の私設鉄道敷設申請
大正 5(1916) 年	3月 上菅谷～大宮間の私設鉄道敷設許可
大正 6(1917) 年	3月 政友会内閣が復活 6月 水戸鉄道が上菅谷～大宮間鉄道建設工事開始
大正 7(1918) 年	水郡鉄道は大郡鉄道（大宮～郡山間）として可決
大正 11(1922) 年	12月10日 山方宿まで開通
昭和 2(1927) 年	3月10日 大子駅開設 12月1日 鉄道省が水戸鉄道を買収し、水郡線と改称
昭和 5(1930) 年	12月 大子町有志が根本正胸像を十二所神社境内に建立
昭和 9(1934) 年	12月4日 水郡線全線開通
昭和 43(1968) 年	11月 大子駅開通40周年記念に根本正胸像を駅前に再建

大正 11 (1922) 年 12 月 10 日の山方宿駅開設記念式での正の祝辞は、水郡線敷設に向けた情熱と喜び、関係者への感謝の念がみごとに表現されたものでした。

(以下その一部分)

本線開通式に至りたるは、国力発展のために祝せざるを得ず。殊に茨城、福島両県の實力発展を増進すること大なりというべし。この幸福を得るに至らしめたる



(大子の胸像前で演説する正；根本喜代壽氏提供)

所以^{ゆゑ}のものは、鉄道国有の法律あるが故なり。

ここに第一に感謝すべきは、この鉄道国有を主張せし板垣退助君なり。第二に感謝すべきは軽便鉄道法を成立させた原敬君^{はらたかし}なり。第三に感謝すべきは明治44年建議の当時、建設部の重職にありたる今の鉄道次官石丸博士なり。石丸君は建議案通過の結果、直に水郡線調査のため出張せられたり。ここに石丸君がいかにもその職務に忠実、かつ献身犠牲の仁たるをしようめいするに足る。君が水戸駅前太平館より線路踏査として出立の日は雨降りなりし。君は早朝人力車に乗車、出立の際、雨降りなれば車の幌をかけたる方然るべしと余は車夫に注意したるに対し、石丸君曰く、道中四方の実況を視察することなれば、いかなる大雨といえども幌をかけるに及ばずと。

正は、この他にも地域へ貢献した施策があります。それらは災害の未然防止として高層気象観測所の設置や横利根閘門^{こりね}の建設、村松海岸砂防林の造成などです。いずれも住民の平穏な生活を実現しようとしたものでした。（ゴシック強調は編者）

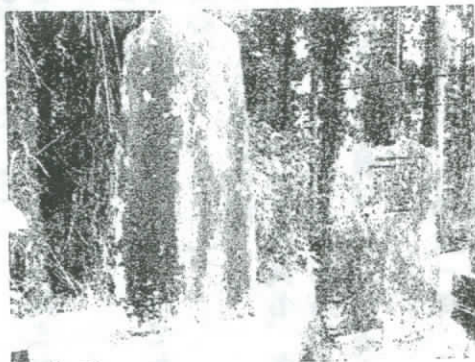
8 おわりに

士分と農民との身分差を痛感していた正にとって、個人的には身分制度を無くし「平等」を実現することは悲願でした。また、幕末における水戸藩内の激しい争いを体験した正にとって、いわゆる「平和」の尊厳を実現しなければならないとも痛感していました。それはやがて、『政見』（大正6年発行）の中にある「国際協調外交（いわゆる幣原^{しへはら}外交）への賛意」となって表れました。その実現には種々の問題もありましたが、根底には「世界の諸民族は平等である」との考えがあり、それ故に互いの独立を認め合わなければならないとの信念がありました。

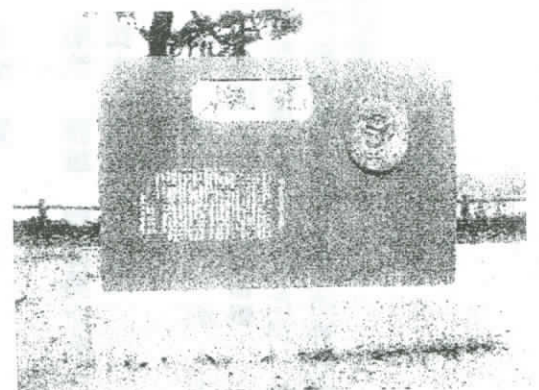
世界的視野を持った国家観、健全な国民の育成という大所高所からの施策を提言すると同時に、地元の発展・繁栄を期した施策の実践に努めた理想的な政治家であったといえましょう。

墓所は、東京青山墓地と生誕地那珂市東木倉の根本家の墓所にあります。

平成13（2001）年には那珂市役所前にある一関ため池親水公園に根本正顕彰会により顕彰碑が建てられました。



（根本家墓所の正・美倫父子の墓）



（根本正顕彰会によって建てられた顕彰碑）

ほたの歴史通信

「根本正胸像」の台座

本町の百段階段をあげり詰めた左側（だいたい小学校校庭の一角）に、胸像のない根本正の台座がある。胸像は、大東亜戦争時、兵器製造のため「金属回収令」により回収され、台座が残された。台座は、礎石、塔柱、笠石からなり、笠石と礎石は八溝石、塔柱の石は押川の西方宇津保沢から採石した自然石を利用して造立されている。根本正の顕彰にふさわしい郷土の資源を利用した重量感のある記念碑である。

根本正は、那珂町（現那珂市）東木倉の生まれ、明治十三年（一八八〇）から二十六年間衆議院議員を務め、未成年の禁酒禁煙、義務教育無償化、水郡線の全面開通に尽力した人である。明治四十四年（一九一〇）、第二十七国会に根本正代議士や福島県境町白石禎美らによつて水郡線敷設案が提案された。水郡鉄道が国会を通過して建設されるまでには、紆余曲折があつたが、大正九年（一九二〇）原敬内閣の時予算案が成立し、大郡線として工事を開始、大正十一年常陸大宮―山方宿間、大正十四年山方宿―上小川間、昭和二年上小川―常陸大子間が開通した（注：同年十二月水郡線と改称）。

昭和三年石井栄次郎（大子）、神永秀介（佐原）らを中心に水郡線開通に努力をした根本正の事績を永久に残しておくために、根本正胸像建設の話が持ち上がり、昭和四年に根本正胸像建設会が設立され、昭和五年（一九三〇）一〇月に胸像が建立された。胸像については、当時の彫刻家の大家・大熊宏氏に請



建立時の胸像



現在残っている台座

造を依頼。大熊氏は靖国神社の大村益次郎銅像の制作者としても知られた彫刻家である。（注：大村益次郎は蘭学、西洋兵学者。明治政府の兵制の大改革に当たった）

碑の正面に、当時の鉄道大臣元田肇の漢詩が刻まれている。

水郡鉄道正全通 百貨輸来一瞬中

料識吾兄帶微笑 山溪到处入春風

碑の右側には、根本代議士自筆の和歌が刻まれている。

国の為鉄をもとかす真心に

なせならざらむくろがねの道

胸像の右側には、記念碑建設に関わつた役員名、各町村別委員名、水郡鉄道記念碑寄付者の芳名を刻んだ石塔が建立されている。記念碑建設に関わつた役員、委員は、次の人たちである。

《記念碑建設役員》

- ・総裁 神永 秀介
- ・副会長 外池 鉄一郎
- ・会長 石井 栄次郎
- ・会計 菊池 信太郎
- ・顧問 石井 鉄太郎

《各町村委員》

- 大子 小崎 儀平 川口 利吉 川口 利作 大藤 保
 - 永瀬三四郎 黒崎甲四郎 野内 成一 益子有造
 - 松浦重太郎 皆吉 賛 益子善治衛門
 - 佐原 石井 覚一 吉成 賢
 - 依上 吉成 俊夫
 - 宮川 菊池 一也 菊池 雅雄 齋藤勇之介
 - 黒沢 飯村 紀一 松本 元永
 - 袋田 野内 武安 桜岡 一郎
 - 上小川 石井利之介 川井 謙吉 ○生 瀬 石井 善蔵
 - 下小川 神永道之助 小室順太郎 ○諸富野 三次 進
- 建設地としては、大子駅前広場が予定されたが、鉄道省の許可がおりないため、第二の候補地である十二所神社前の駅を見下ろせる現在の高台の地が選ばれた。
- （小澤）

「大子の歴史散歩 第2回」 水郡線建設と根本正

水郡線常陸大子駅前広場の中央に、駅舎を背にしてブロンズの胸像がある。これが根本正の像である。

根本正は、嘉永四年（一八五一年）、那珂郡東木倉村に生まれ、明治十二年（一八七九年）、二十九歳の時渡米、苦学して、パーモント大学を卒業、キリスト教と合理主義の精神を身につけ、明治二十三年に帰国した。根本は、政治家を志し、二十三年、二十七年の落選の後、三十一年に当選、以来大正十三年（一九三四年）まで二十六年間衆議院議員として活躍する。

明治三十二年に「国民教育授業料全廃の建議案」を議会に提出、可決。どんな子供でも教育を受けさせるようにしなければならぬと、近代日本の教育発展に貢献した。小学生の教育費が国庫の補助を受ける以上、その小学生



▲ JR常陸大子駅前ロータリーに立つ根本正の胸像
(平成11年6月21日撮影)

がタバコを吸い、酒を飲むことは健康に害があると、明治三十二年に「未成年者喫煙禁止法案」を議会に提出、可決。「未成年者飲酒禁止法」は、二十三年間を費やして大正十一年に可決した。水郡線建設については明治四十四年建議案を議会に提出するが難航し、国の事業として決定するまで、実に十年間を費やした。

なぜ、根本正は、水郡線建設に情熱を燃やし続けたのであろうか。

建議書には、鉄道により、大子地方の葉タバコ、コンニャク、大麦、和紙など農産物の輸送をはじめ、八溝山一帯を中心に産出する木材、木炭、薪などの輸送が可能になり、商工業の発展に利することきわめて大きいと述べる。

現在は車社会で、高速道路が人間生活の動脈的働きをしているが、その当時は鉄道がそれに代わるものであった。

これを当初から国有として建議したのは、私設資本にまかせる限り、片田舎のあまりかえりみられない所は、いつまでたっても建設をみず、発展をみないという不合理に対処したいとする、根本の「神はかたよらず」という信念であった。

大田線の水戸太田間（一九・六キロ）は明治三十二年四月に開通しているが、山間地帯でトンネルや橋を多くつくらなければならぬ曲りくねった水郡線は難工事の連続であった。上菅谷大宮間は大正七年、大正十一年に山方宿まで、大正十四年に上小川まで、昭

和二年三月に水戸大子間（五五・六キロ）が開通する。

当時、大子の地に汽車が走るなどはおおよそ夢想だにもしなかつた。ここで、汽車に乗るラウと思えば北は白河、南は大田、西は西那須から氏家と、ここに出るにも大変だった。この山奥の町に汽車が走るというのだから土地の人にとって、その驚きと感激は大変なものであったという。

昭和五年に大子東館間が開通、茨城県内での全線開通を記念して根本の胸像を十二所神社境内（現大子小学校校庭）に建立する。

碑文には、根本の「国の為め 鉄をもとかす真心に なすならざらん くらがねの道」の歌が刻まれている。

昭和八年（一九三三年）、八十三歳で根本が死去するが、その翌年、昭和九年に水戸郡山間（二四二・三キロ）の全線が開通する。鉄道の開通は、大子地方と、東京をはじめ水戸、郡山などの各都市との結びつきを深め、各駅では、背後の森林や農産物と結びついて、大子地方発展の要因となった。

胸像は太平洋戦争中の金属回収によって姿を消すが、昭和四十三年に大子駅開通四十周年を記念して再建（常陸大子駅前）された。碑文に、「國を憂い郷土を愛した先生の英姿を万人の仰ぎ得ることとなった。先生の高德偉業と後世の人士の報恩の至誠を永遠に伝えることとした」と刻まれている。

(四) 西金駅の開設

大正八年に水戸から大宮まで、汽車が通るようになった。やがて、奥久慈を縦貫して郡山まで開通すると決まった時、沿線の人々は狂喜して躍り上り、明るい気分になった。大正一〇年（一九二一）いよいよ大宮以北の実地測量が開始された。最初の予定駅は、山方宿駅から上、下小川駅、袋田駅、太子駅で、路線が西金に入ってから小学校裏坊屋敷から西金宿の上の畑を通り新畑口駅が設けられることになった。ところが測量の結果は、盛金の川原の真中（当時）に下小川駅ができて次の駅は現在の上小川駅と決まり、西金は素通りになるとわかったのは、この年の一〇月であった。夢にも思わなかったこの変更は、西金の区民は色を失ってしまった。幾度か区民の会合を開いた結果、西金宿、寄居、橋下、湯沢、それに上小川村の川下、新畑の住民たちは一致団結し、西金駅の設置を目指し一斉に立ち上ったのである。早くから鉄道の誘致に努力していた神長道之介、小野瀬英、村長小室隆を中心に、村の有志、壮青年団代表は、幾回となく上京し倦むことなく鉄道当局に陳情したが、わずかに四里の短区間に新駅を設置することは絶望に近かった。そこで更に石井三郎代議士（久米村）同じく水郡線建設に尽力した根本正代議士（後台村）、大津淳一郎貴族院議員（高萩市）に依頼して猛運動を続け、ついに大正一一年七月三日西金駅増設が承認された。しかし駅の指定場所は狭隘なので、県道を付け替えなければならなくなり、畑二四歩、田七畝一五歩を買収し、県の許可を受けて県道の付替工事を行なった。この工事には西金及び盛金の内野、上原、黒丸、上小川村の新畑、川下、諸富野村の北富田の各地区民が総出で手弁当で労力奉仕をした。この時の労力奉仕者数と寄付金は次のとおりであった。

労力奉仕者	西金区民一五〇戸	二六六二人
	他村	二九四人
寄附金	西金	三三〇〇円
	他村	一四八円

このようにして西金駅は大正一五年（一九二六）二月二一日開通したのである。区民の喜びは筆舌に尽くせないものであった。この日は、空前の多彩な催しでにぎわった。この不退転の事業を記念するため昭和三年九月「感謝之碑」が西金駅前に建てられた。その碑文は次のとおりである。（略）

（田山有野史）

天狗党・田中隊百五十回忌法要記念誌

『田中隊長 田中愿蔵を偲ぶ』

生きては忠義の

人となり

死しては忠義の

鬼とならん

田中愿蔵自筆

(処刑された後、懐中から発見された)

(摘町安楽寺縁成)

田中愿蔵の(信念)と(勇氣ある決断)

田中愿蔵は弘化元年(一八四四年)常陸太田市水府町の猿田玄碩の次男として生まれ、愿蔵二才の時、水戸の下屋敷に移る。父は水戸藩主徳川斉昭に見出されて藩医として仕えた。六才の時、原忠寧が主催する菁莪塾に入る。のちに水戸弘道館で学び、さらに江戸の昌平坂学問所(のち東京大学となる)で儒学者安井息軒に師事し、儒学・兵学などを学んだ。その時の学友が藤田小四郎で勉学を共にした。のちの天狗党挙兵の仲間となる。一八六二年、水戸藩主徳川慶篤に随伴して上洛(京都)、京にいては時局の勉学に奔走し、軍学に深い備前(岡山県)の藤本鉄石の門下に入つて学んでいた。藤本はのち倒幕の先駆者として天誅組の変(一八六四)に参加、大和の五条代官を襲撃したが、失敗戦死した。

田中愿蔵は十九才にして帰郷、安井息軒の推薦により時雍館(野口郷校)の館長となり子弟教育に努力精進した。一八六四年、水戸天狗党の筑波山挙兵に藤田小四郎と共に参加した。田中愿蔵は奇兵隊長として軍資金調達に貢献した。(当時の水戸藩は諸生党・天狗党の内紛、幕府の内政干渉の強化により混乱の極みにあつた。)

天狗党は日光に出向き、日光にほど近い太平山に陣を置いた。そこで、田丸総帥は天狗党が挙兵した大義名分の施政方針を発表した。その綱領の骨格をなすものは「尊皇攘夷と敬幕」という水戸学の理念そのもの「天皇を尊び、幕府を敬う」の内容に終始し、挙兵にはあいまいな声明だつた。

徳川幕府を倒すという倒幕の精神はみられず、同志の中から反対攻撃する声が起こり始めた。今まですべてに寡黙を守つてきた田中愿蔵は藤田小四郎の水戸に戻る提案に敢然と反論した。

「先君烈公の御遺志を奉体し、大義を唱え、天下に魁けて義旗をあげ、檄を四方にとばして換氣して参つたではないか、しかるに、家族の安危が気にかかり、陣をはらつて水戸へ帰えれなどとは笑止千万。我等は、草鞋の紐を結んだ時から親兄弟妻子と別れ、家を捨て、我が身を草むらの露に果てる覚悟で参じているもの、素願貫徹のためには尚一層の力を合わせ、進んで倒幕の道をひらかねばならん」と、田中愿蔵は心にたまつていたものを一気にはきだした。何が挙兵の目的かと激しく詰め寄りあくまで倒幕を主張した。公の場において、誰もが口外したことのない「倒幕」という言葉、藤田小四郎は、「『倒幕などとは名分にもとる暴論であり、幕府を蔑ろにするものである賊徒の方便よりお粗末なことだ』と、怒つた。尊皇敬幕の田丸・

藤田らとの間に激しい論争があつた。論争は『尊皇敬幕』と『尊皇倒幕』の天狗党を二分する決定的な要因となつた。

千名余の兵馬と武器を備えて幕府に立ち向かう以上、それは完全なる謀反であり、それでもなおかつ幕府を敬い、深く恭順いたしますというのではあまりにも矛盾した論理であり、大義とは名ばかりで、不徹底極まる筑波山拳兵といわざるを得ない

田丸の筑波勢と決別した田中愿蔵は、同志三百余名と別行動をとつていた。田中愿蔵は一隊を率いて、各地で「尊皇倒幕」を呼び掛け遊説をつづけた。

幕府では、天狗党は謀反の気ありと、水戸藩への内政干渉を強化、若年寄田沼玄蕃頭意尊が総指揮を執り、幕命により天狗党の取締りを強化した。北関東・南東北の各大名に領内において軍資金等の調達に協力しない追討令を出した。そのために天狗党も田中隊も軍資金調達に深刻で、いろいろな問題が生じた。田中隊に加盟するには頭髪をばつさり切り落とし、その髪を束ね決意をした。今までの武士のしきたりになかった自由奔放な風体から田中隊は断髪隊又は『ザンギリ組』と呼ばれた。見方によれば、「四民平等の理念」とも言えよう。旗本武士のような格式ばつたおごりと、伝統というものがなだけに、『尊皇倒幕』・『四民平等』の実現に共鳴して入隊をてくる若者が後をたたず、田中隊の人数は増大した。(ザンギリ頭は長州藩の高杉晋作が組織した奇兵隊と同様に↓世直し的な要因)

田中隊は軍資金調達に苦勞しながら筑波町に宿営し、火事の実情を田丸総帥の使者に説明、犯人が次の間に控えているので、貴殿から直接詰問くださいと、勸めている。これが栃木の火事の実情であることを強調した。のち田丸の筑波勢から「烈公の神位を護持している我等こそ、天狗党の本隊であり、田中愿蔵が如きは諸国浪徒の集団であつて我等筑波の本隊とは一切関係のないことである。」と、田丸の筑波勢からこのような流布され、村々では自警団を組織して立ち向かつてくる始末となつた。田中隊は野口村に本陣を置き、しばらく滞陣することにした。野口村では名主はじめ村ごとあげて田中隊をもてなしてくれた。これも館長時代に培つた田中愿蔵の人情にあふれた人徳施政のなすところであり、村の人たちは、危険を承知で田中隊の一行を受け入れてくれたのである。田中愿蔵は野口村に滞陣中は、隊を参謀の土田と今瀬に任せ、西に東に馬を飛ばして時局の把握に走つた。江戸、或いは、攘夷騒乱の元凶である横浜まで足をのばして夷人の村を密かに偵察したともいわれている。

田中愿蔵が野口村に戻つてみると、意外な報せが待つていた。田丸総帥は、天狗党より田中愿蔵を除名処分にすると発表した。筑波勢からの除名を知つた田中愿蔵は動揺もしなかつた。田中

隊の士気をますます鼓舞し『倒幕あるのみ、我等はその栄光の先鞭たらんとするものである大義の先兵となつて倒れることはもとより本望である』と潔よかつた。筑波勢は「放火、掠奪、金穀を押借し、人心を乱して恐怖におとし入れ、乱暴の限りをはたらいっているのは田中愿蔵率いる乱暴者たちである。我等筑波勢はわずかの難題も行なつていない。白日のもとに潔白である。」と、一方的に大いなる宣伝を行い、田中愿蔵をして、一切の悪人に仕立てあげたのである。さらに、この時期は、まだ倒幕運動は本格化しておらず尊皇攘夷運動が盛んで、一八六四年上旬、第一次長州征伐で幕府が勝利し、幕府の権力を西国諸藩に見せ付けた、このような時、どこよりも先に、天誅組、但馬生野の二の舞にならないために、もつと兵馬を固め、武器を備えて堂々と幕府に見参すべきと倒幕を訴えた。

倒幕運動は一八六七七年に薩摩・長州等により本格化するが、関東・東北は幕府の影響力が強固であり、水戸藩は御三家で五代将軍慶喜の出、水戸学の本家であることから倒幕運動などは危険視され受け入れられなかつた。しかし、田中愿蔵等の倒幕運動は時期尚早だったが、この運動が三年後に実現し、明治維新建国に大きな影響を与えたことは事実である。

維新政府が会津戦争の際、棚倉に本陣を置いて総指揮官をとつた板垣退助は棚倉に入る前に、塙の向ヶ岡公園に数百人の兵隊を整列させ、田中愿蔵等の墓に最敬礼し、倒幕運動を讃え、棚倉へむかつた。板垣退助は棚倉の陣に居る間、再三田中愿蔵等の眠る安楽寺の墓に参に来たと記されている。

田丸の筑波勢の中には、諸生党・幕府追討軍と激しい戦いが展開される中で、太平山での大論争事件で、田中愿蔵が「諸生党などに目を向けているとき時ではない。小異を捨て、今こそ幕府に立ち向かう好機到来であると」主張したことが、筑波勢に戻つた人々に中に、今にして反省してみれば、やはり田中さんの言われたことがまさに正道であり、天狗党拳兵の本懐であることを痛感した。大義に向つて突進する田中愿蔵の信念に敬服した。のち、筑波勢から数百人が分裂することとなつた。筑波勢にとっては大きな痛手となり氣勢をそがれた。

幕府追討軍総指揮官田沼は関東・東北の諸大名に天狗党壊滅を命じた。水戸城攻防をめぐる諸生党・天狗党の対立の激化、国中は東も西も騒乱の渦中にあり、幕府としても極めて困難な状況にあつた。天狗党も追討が激しくなり、各地で戦いが繰り広げられた。十月那珂湊に追い詰められ、「今、諸生党・幕府追討軍と戦つて全滅するより、西上して京都にいる一橋慶喜公に我等の真意を訴えよう」と提案した藤田小四郎に従い、那珂湊を荒々しく脱出した。

その頃、田中隊一行は諸生党と天狗党の権力争いを偵察しな

し

御城 (みじょう)

1 どこに

国道118号の山方バイパスを北上すると右手に久慈の清流、正面に城郭らしきものが見えてくる。御城展望台である。このトンネル上の高台が御城である。旧山方町山方の北端にあたる。

御城展望台は、昭和63年に作られ、山方氏の分家子孫寄託の史料等も展示されている。

2 どんな

下の「高館、御城址略図」を見ると、東から西へ本城、中城、外城の三郭が並び土塁と空濠が巡らされ、北、東、南は崖に囲まれている自然の要害の城址である。水戸城を連想させられる。大きな違いは、外城の空濠を挟んだすぐ西に険阻な高館山が控えていることだ。この高館山にも土塁、空濠が構築されている。城主は本城、中城に住み、家臣達は外城、下級武士は南崖下の根古屋に住まいした。

根古屋前の皆沢川に嘆願橋が架かっている。一般人はここから中には入れず、嘆願等は橋の手前で役人に取り次ぎを頼んだ。

3 だれが・いつ

最初に、だれが・いつ構築したかは定かではないが、佐竹氏の勢力拡張と領土保全のための出城として重要な地であったことは間違いないだろう。

地名が山方であることからしても、応永年間から慶長7年の佐竹氏秋田移封までの約200年の大部分を山方氏7代が御城の館主であったことの意味は大きい。大部分というのは、山入の乱対策で主君筋の東政義が一時御城に入ったためである。山方氏が一族を挙げて秋田に移り、水戸徳川氏の就封と同時にこの御城は廃された。

4 山方氏について

関東管領家上杉の一族で、憲利の時、美濃国山方郡を領し初めて山方氏を称した。その子盛利は、ある殺戮後、上杉憲定にかくまわれていた。

その憲定の子である上杉竜保丸(義憲)が、太田の佐竹義盛の養子となり常陸に下向した。その際、山方盛利が義憲の傅役・後見人として太田に来て佐竹の重臣に加わり、御城の館主に封ぜられた。常陸国山方における山方氏は、この盛利を初代とし、俊則、俊治、国利、定利、篤定、重泰まで代々能登守を称し佐竹宗家のために忠勤を励んだ。

5 他に 南郷街道 国道118号 山方の宿 山方バイパス 水郡線 陰陽神社

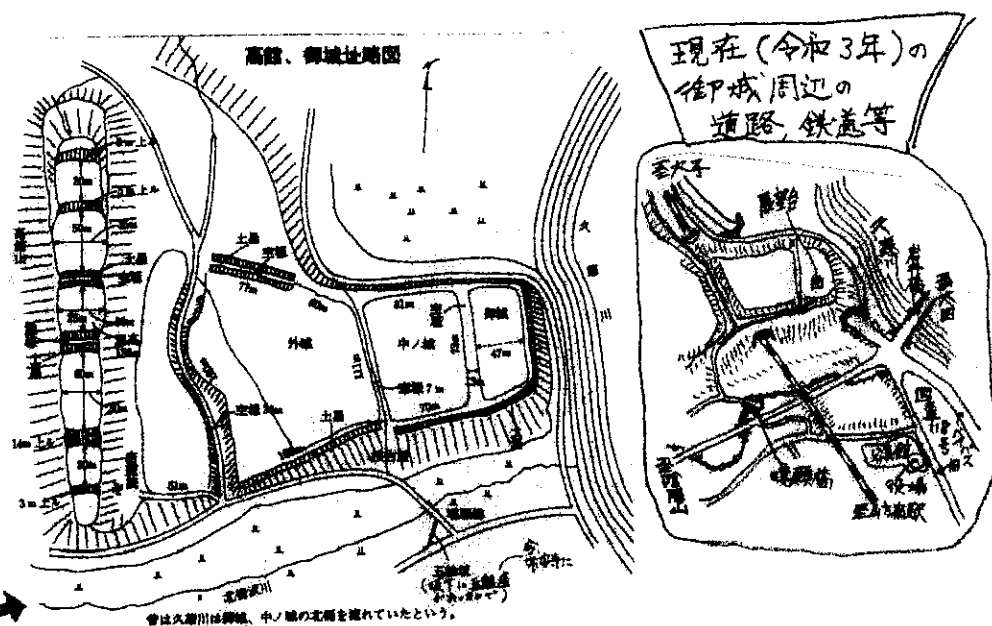
嘆願橋を過ぎ、御城への登り道の傍らに南郷街道の小さな案内板がある。南郷街道は、山方町の役場・中央公民館のところまで西に折れ、嘆願橋を渡り中城と外城の間を抜け北の崖を下り北上している。太子方面への主要な通りだった。その後、御城の東、北の崖の中腹を巡るような新しい道が整備されると、嘆願橋経由のルートはさびれた。新しい道の名残として、新上町・新道の集落名が残る。

山方宿駅、役場、御城東と北進するこの道路、当時の国道118号沿いが、旧山方村・山方町の中心街であった。昭和終期に、山方バイパス・トンネルができると、かつての賑わいは今は昔となった。

水郡線が城址の下をくぐってまもなく100年になる。

光圀公ゆかりの陰陽山・陰陽神社には、日を改めてぜひ訪れて欲しい。

山方町誌(上巻) (4851.10) ➡



鹿島清秀五輪塔

大平山白馬院常安寺(曹洞宗)の北側の道路から嘆願橋に下る坂道を五輪坂といい、その角にかつて五輪塔があったが水郡線建設により大正11~12年(1922~23)に現在地の常安寺入り口に移された。高さ2メートルもある巨大なもので、常陸大宮市の有形文化財となっている。これは鹿島清房の墓となっているが、正しくは鹿島清秀である。

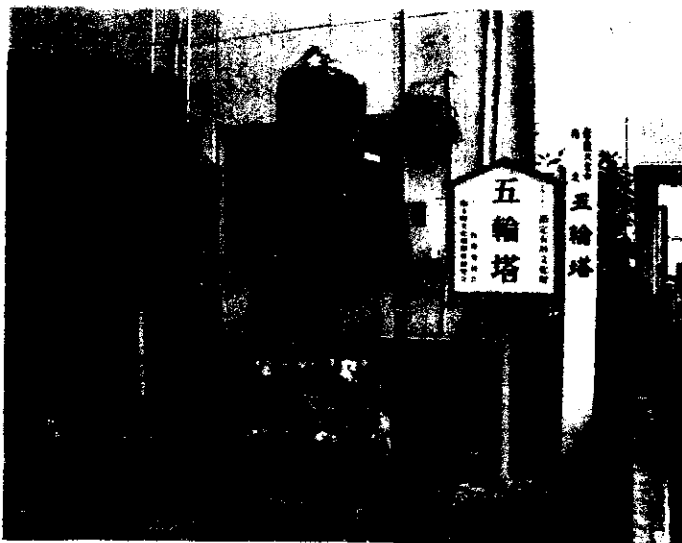
天正19年2月頃に常陸佐竹氏が鹿島、行方2郡の領主たちを太田城に招いて佐竹氏の兵によって殺害した南方三十三館謀殺事件である。

鹿島清秀は大正17年(1589)に鹿島神宮大惣行事職となり鹿島城主であったが、この事件後鹿島城も攻撃されて落城している。その後、近世に入り鹿島家は再興されておりこの地で殺害された供養のため五輪塔が建てられました。

大串無事衛門の墓碑

17世紀中頃山方町に生まれ育ち幼少のころから父母をうやまいまた学問にもはげみました。年老いた母が快適に暮らせるように季節によって寝床を変え歩行の際には必ず付き添い神社仏閣や親戚へ行きたいと言う時には夫婦で仕事を休んで母の意に沿うように心を砕いたといひます。

江戸時代は下位の者が上位の者を敬い上位の者は下位の者を慈しむ儒教の教えが広められていました。模範的な農民像として称賛され他の農民にも理想として示されました。



鹿島清秀五輪塔



大串無事衛門墓

名称	常安寺 由緒 太平山 白馬院 常安寺
開創	文明二年（一四七〇年）
開山	南極壽星大和尚
開基	常陸太守佐竹義昭公

常安寺は山方對馬守の菩提寺として創建されました。

永正十六年（一五一九年）東政義が当地に白馬寺を建立したが、東家の所領替えにより白馬寺は文祿元年（一五九二年）、石塚（城里町）に移されました。その跡地に佐竹義重公が、父義昭公の菩提の為に建立されたのが常安寺です。

義昭公の法名は常安源真大禪定門で、寺名の由来です。

佐竹氏の秋田移封後は、徳川氏より御朱印を受け、人々の篤い信仰を受けて来ました。

文久元年（一八六一年）火災にあい、また元治の変（元治元年 一八六四年）で再び焼失したが、大正八年（一九一九年）仮堂が建てられ復興されました。（再興主長福寺泰石道痴大和尚）

現本堂は昭和二十七年（一九五二年）五月落成しました。

昭和四十七年に客殿庫裏落成、昭和六十年には本堂屋根銅板葺替、境内整備がなされ、平成元年常安寺霊園造成、平成十四年本堂内外が改装され、今日に到っております。



地割の山容(諸沢)寢姿山